地誌研年報5号，1996年3月
ANREG 5,March 1996

広島大学総合地誌研究資料センター主催1995年度シンポジウム

地誌学とエリアスタディ　－現状と課題－

総　合　討　論

〈Symposium〉 Regional Geography and Area Studies Reconsidered

Discussion

米田　巖（広島大学総合科学部）：9時半から始まりだいぶ時間がたったので，皆様にはお疲れのことと思うが，最後の締めをしたい。フロアから質問用紙をたくさんいただいているので，十分に私どもが中味を集約できない場合もあろうかと思う。さて，非常に内容が濃く密度の高い興味深いお話をうけたまわったが，オーガナイザーの方から大きなフレームワークとして提示されたものがある。それに厳密に縛られてしまってはかえって本末転倒になるが，その4点に収斂していくように努力したい。ところで，多くの質問は，それぞれが必ずどこかにつながっていて整然とは分け難いように思う。まず中山氏に対して「中山氏自身の地理学とは何か。地誌学とは何か。ぜひお聞かせください」という質問から始めたい。

中山修一（広島大学大学院国際協力研究科）：地理学の人々が考えている地理学に対して私は何ら異論がないが，私は地誌は書くことでもってこと足りるという考え方をもっている。地理学の研究者が地誌を書くということで十分だ。それでは，地誌を書く目的は何かと問われれば，個人あるいは社会集団が自己を時代の変動の中に置き，自己や集団の進歩を実感しているときに，身の回りに存在する場所がどのような地域性を有するのか深く認識したいという欲望がわいてくる。この欲望や欲求に応えて，地誌は書かれればよいと考える。つまり地誌は，地理学の研究者が，時代の変化を鋭敏に感じたときに初めて書けるものだと思う。それがない場合には熊谷氏のいう味もそっけもない地誌ができることになる。つまり，自らが世の中の変動を敏感に感じていないときには，味のある興味深い地誌は書けないと思う。社会が急激に変動しはじめると，地誌を書くことへの欲求がわいてくる。つまり，自分のまわりに存在する場所と自らの変化，自分がいる社会の変化がどうかかわりあっているのかという意味で，熊谷氏のいう自己アイデンティティ，あるいは国民のアイデンティティと非常に深く関わっている。そこで，自己存在の場のアイデンティティに不安を抱いたときに地誌を書くことになる。これがないときには，書くエネルギー

が高まらないので，そのような時代に書くとおもしろくない無味乾燥な地誌ができてしまうと考えている。したがって，すぐれた地誌というものはいつの時代でも常時存在するものではなく，激動の時代の中ではじめて地誌を書くことへの欲求が生まれ，地理学者がその時に書けば魅力的な地誌が書けるものと考えている。

米田　巖：今すぐさまこの問題を議論すればよいが，一応両サイドとも頭に押さえたうえで総合討論をしたい。それからもう一つきわめて重要なことと考えるのは，高橋氏からの質問で「地誌学あるいは地域研究において，自然地理学をやってきたものにとっての役割はいったい何だったのか，自然地理学者の役割りはどこにあるのか」という問題だ。堀氏に答えてほしい。

堀　信行（東京都立大学理学部）：質問は重いが，自分に関していえば，これまでの私の人生が，いまの質問を浴びせ続けた歴史だ。例えば，私が地形の発達史を知るために，フィールドワークを積み重ねていくのは，地形に対する知的関心を追い求める自然地理学者としての私自身である。ところが私自身の中にもう一つの私が存在している。その一例を示せば，サンゴ礁地形を調査しているときに，私自身は礁形成の一般理論を求めて個々の地域を突き抜けていくことになる。そこに地域を突き抜け，サンゴ礁形成の一般則を説明できる喜びがある。しかし，サンゴ礁を舞台に繰り広げられているその地域の生活に目を向けた瞬間，もう一つの私自身が頭をもたげてくる。それは自然地理学を研究している自分から，生活者としての自分自身になる感じがする。地理屋であることは，イコール全自分でもある。したがって，「地理」を語ることは，全自分の感性や価値観を問い詰めることにもなるから私には重い。とはいえ，私にとっては，自然地理学に関わる自分なくして地域を見る目は生まれてこない。と同時に地域の姿に自分を重ねてみる私もある。どちらも地理屋である私自身の両輪なので，一方だけが大切とはいえない。

高橋日出男（広島大学総合科学部）：私個人は気候学を研究しているが，地誌的な書物等を読むと，そこで扱われている自然環境が単なるバックグラウンドとして総論的にしか語られていないような印象を受ける。このことに，自然地理学に興味を持つ若い人たちが物足りなさをおぼえて，地誌という方向にあまり行かないのではないかという気がしており質問させていただいた。堀氏から貴重なご意見をいただいたことに感謝する。私は，人文地理学の立場から地誌をやっている人にもご意見を聞いてみたい。

米田　巖：この問題は後で全面的に取り上げてみたいと思う。「人文地誌」とか「自然地誌」という区分は実質的にあり得ないという意味においてだ。地誌学の究極的な目標が，対象とする「地域」の全体像を動態的に活写することにある。協業による分業ならともかく，今日のように人文・自然に分けること自体が自己矛盾だという問題意識にたてば，こ

れから本格的に議論を展開していくだけの価値はあると思う。幸いなことにフロアにも自然地理学の方々がおられるので，ぜひ人文・自然の交流，意見の交換を深めていきたいと思う。今の質問に関して，人文地理学の方から自然や生態に関する研究や学び方が不足していたのではないかという自己反省も含めて議論がでている。これは後ほど取りあげてみたいと思う。もう一つはコレーム（chorématique）という概念について，「そのフレームワークのなかに，文化ないしは文化的事象，あるいは現象がどのように取り込まれるのか，あるいはまたすでに取り込まれているのか」ご教示願いたい。

手塚　章（筑波大学地球科学系）：先に高谷氏から地域を捉えるときに個別派と連関派があるという話を聞いたが，コレーム地理学は基本的には連関派に属する枠組みだ。要するに，空間構造の比較的広い状況のなかで地域を位置づけようとするものであり，しかもその位置づけは経済主義的な印象が強い。ただ文化地理学を重視しようとする世界的な流れもあり，フランスでも3年前から『地理学と文化』という新しい雑誌が出版された。それはコレーム地理学の流れとは違った流れになると思われる。それに，先に紹介したラコスト（Lacoste,Y.）が中心になっている，政治的なプロセスを非常に重視するジオポリティック（Geopolitics）の一派がある。ジオポリティック＝ジオグラフィと考えているわけではないが，ジオグラフィの中で非常に欠けていた政治プロセスを前面に出している。こうしたそれぞれの流れが現時点では総合化されていないという感じがする。

米田　巖：それでは次に移りたい。高谷氏のいうように，地球上に2種類の地域があるとすると，「大文明型はどちらに属するか」という質問にお答えいただきたい。

高谷好一（滋賀県立大学人間文化学部）：2種類というのは属地的地域と属人的地域のことか。

米田　巖：そのことを指すと思う。

高谷好一：私の考えでは，大文明型の地域はそのいずれにも入らないと考える。私は大文明型の地域をそれ自体で一つの類型と考えており，レジメに図で示したように，一方には生態型（生態適応型）があり，これが属地型になる。もう一つのネットワーク型が属人型に当たる。そして，それとまったく別に，イデオロギーが2000年以上続いてきている大文明がある。さらに，もう1つ別にクレオール（creole）とかヴァナキュラー（vernacular）といえるものがある。これには異論があると思うが私の考えだ。

米田　巖：次の質問は，「エリアスタディでは東アジア・東南アジア・南アジアという区分ではなぜ不都合なのか」だが，これについてはもうすでにお答えいただいたのだろうか。

中里亜夫（福岡教育大学教育学部）：この質問を書いたのは私なので少し説明したい。「不都合」という言い方には問題があるが，エリアスタディの研究ではもっとミクロな取

り上げ方が必要なためにこのようになったのかと思う。現在の国連，開発経済学などで分類される南アジア・東南アジア・東アジアという分け方がなぜ不都合なのか，理由があればお答え願いたい。

高谷好一：ごく簡単に答えたい。南アジアに関して都合が悪いのはヒンドゥ的なインド世界とイスラミックなパキスタンやバングラデシュとの間に違いがあり，南アジアという括り方は不都合だ。東南アジアにしても，先ほど東南アジアは大雑把には熱帯多雨林多島海といってよいと述べたが，それでは無理なところがある。早い話が，インドネシアをとってもジャワとボルネオではまったく違う。ジャワは人口密度が高いが，ボルネオはほとんど人がおらず森ばかりのところだ。歴史も違うしコスモロジー（cosmology）も異なる。中国についても，沿岸の中国と北京を中心にしたいわゆる中心社会を構成している中国とは異なるだろう。したがって，海岸中国と内陸中国とに事実上分けた方が適当だ。そのようなことを考えて分類している。

中里亜夫：それと関連して１つ質問させていただきたい。東南アジアについては私にはよく理解できるが，高谷氏がいわれる政策科学としての位置づけ，現在の世界的な流れからいえば，南アジア的なもののなかにヒンドゥとムスリムの特徴があるというのが現実的だ。むしろそれを政策というレベルで考えると，どうしてヒンドゥに集約していかなくてはいけないのかよくわからない。

高谷好一：私が政策といったのは，言葉が悪かったかもしれないが，各国政府が考えている生々しい現実の政策を指すのではない。やがてポストモダン的な時代が到来する。だがそのポストモダンでもアモーファス（amorphous）な格好ではなくて，何らかのポリティ（polity）というものが作られなければならないだろう。そのように考えるときどんな地域群ができるのかを予見しておく必要がある。理想の世界秩序を探るのだという目的意識をもった研究という意味で政策という言葉を使った。いわれるとおり，今インドがヒンドゥ中心だということをいっているのではなくて，これではむしろ困ると思う。バングラにはバングラの独自性があるべきだし，ヒンドゥにはヒンドゥのいい分があり，それをいかに共存していくかをむしろ考えねばならないところだと思う。

米田　巖：次に，「パプアニューギニアの地域区分は熊谷氏自身が行ったものか。何の指標を用いて行ったのか。その場合に，熊谷氏自身のオリジナリティがどこにあるのか」という質問がフロアーから出されているが，それらの根拠を教えていただきたい。

熊谷圭知（お茶の水女子大学文教育学部）：詳しく説明する時間がなかったが，配布資料の３枚目のＢ４サイズの表がパプアニューギニアの地域区分とその特質を示したものだ。これは右下に筆者作成未発表と書いており，人口密度やオーストロネシアとノンオースト

ロネシアという2つのグループに分かれる言語系統などを指標としている。内陸部と島嶼部，海岸部とでは言語系統が異なる。それから生業形態の違いや主作物の違い，さらには自然条件や歴史的な問題というか植民地政府との接触の時期とそれによる社会経済的な変容のあり方ということを組み合わせてこのような区分をしてみた。それで理解していただけただろうか。

米田　巖：それに関連して，熊谷氏自身はこれまでの調査や今後の調査で，地誌研究というよりも地域研究の方を主に指向していくつもりか。

熊谷圭知：これは非常に大きな問題で，最後にこういう話をした方がよいのではないかと思っている。

米田　巖：一応その方向性だけでも尋ねたい。

熊谷圭知：私自身は地理学者として地域研究をやると思っている。それが結果的に地誌と呼ばれようと呼ばれまいと，それはレッテルだけの問題であると了解している。

米田　巖：後ほど大きな問題になろうかと思うが，論点として留保しておきたい。次に，中山氏と堀氏への質問だが，「地理学者が他分野の地域研究者と共同しながら，地理学的ディシプリンを通じて独自の貢献ができるとすればどんな方法で可能か，あるいはどんな認識においてであろうか」という質問がある。やや抽象的な言い方だが，要するに地理学という枠の中での協力の仕方についてだ。

中山修一：地理学が行う地域研究の分析の枠組みということかと理解するが，基本的には地理学の研究者としての特徴が出ているということが大前提だ。地理学者が地域研究をする場合に，何がその基本枠かということが，常に問われなければならないと考えている。地理学者の研究では，分析の単位が地域で始まっているのが本筋だと思う。具体的にいえば自然的条件と人文的条件の両方を扱うのはもちろんのこと，ベースとしての地域，たとえば日本よりももっと小さく，東広島市の地理学的研究という場合には，必ず東広島市の地域単位，町丁別のジオグラフィカル・データが分析のベースになっているのが地理学的研究である，と考えるのが最も適当だ。その逆の場合もある。たとえば，工業システムで変数の方が地域になっている場合には工業経済学的研究と言えよう。しかし，場所が基軸になって，その他の情報が変数である場合が地理学的研究であると理解できる。とすれば，地理学の貢献は自然的な条件あるいは社会的・文化的なものまで含めての人文的条件，これは先ほど堀氏がいった4つの「チ」があろうが，総まとめにすれば自然的条件と人文的条件とこれまでいってきたもので，場所を基軸にして議論をしている研究が地理学的な地域研究であると考える。

堀　信行：短くいえば誤解があるかも知れないが，「地理学はこれこれの項目からなる」

とはじめからいうのは，今の私には重要なこととは思えない。「あぶり出し構造」というか，自分の中である場所のことを考えたとき浮かび上がってくるものが重要だ。例えば，「この人たちから地面を，あるいは場所をとったらどうなるのだろうか」ということを考えたとき，「地理学だから場所を考えるのだ」というのではなく，場所のことを考えずして，その土地や人が語れないという必然的な場面があると思う。それが自分の中に立ち上がってくるかどうかが問題だ。十二色あるからといって，その色のすべてを述べなければならないのではなく，おのずと浮かび上がってくる色を述べればよい。それがその場所だということになる。地理屋が何に貢献できるのか。地理屋である自分が他分野の人との間に実感される具体的な違いがあるとすれば，それには私自身の履歴がとても効いているように思われる。他分野の人が見過ごしていたり無視してきた土地条件とか自然環境について，その場所の生活者の目とまったく同じというわけにはいかないが，土地の人たちがもつ勘所のような部分が徐々にわかってきて，その世界に急接近できることがある。そんな感触をフィールドで感じることがある。もちろんそれとは反対に，私にはとても疎い世界で近づけない自分を痛感することもある。われわれ調査者の関心や目は，所詮偏っているのだ。それに対して，土地の人たちの生活はトータルなのだ。調査者である私の観察や思考は，トータルな世界に対してつねに部分的で偏ったものといえる。したがって，フィールドワークには自分自身のこうした偏った目で観察するしかないという限界がある。だから，「地理屋としてのあなたの貢献は何か」と問われれば，偏った自分の目から浮かび上がり，偏った自分の感性から臭ってくる対象世界について語ることになる。そこに四つの「チ（地・知・血・霊）」の体系の部分があれば，それだと私は感じている。

米田　巖：全面展開のためにあともう2つほど聞きたいところがある。やや重複するかもしれないが，手塚氏に再度尋ねたい。「ブリューネ（Brunet,R.）の『ジオグラフィ・ユニベルセル（Géographie Universelle）』の具体的な記載方法，つまり地誌記載の方法は従来の地誌とどう違うのか」。これには2つの理解の方法がある。フランスでは世界地誌はこれまで4回出版されている。最初は1810年のマルトブルン（Malte-Brun,C.），ルクリュ（Reclus,E.），それからヴィダル（Vidal de la Blache,P.），ブリューネの順だ。そのなかの各地誌書の前後間の問題とそれ以外の地誌との差異が考えられる。質問者の川田氏にどちらを指すのか聞いてみたい。

川田　力（広島大学文学部）：私の質問の主旨は，ブリューネの記載方法が従来の地誌学（他のシリーズ）に対してどう違うかだ。

米田　巖：このシリーズの中での特色というのか，発展の系譜からみればどのような差異があるのかについて尋ねているものと思う。

手塚　章：地誌はそれを生み出す社会的背景があるわけで，4種類の『ジオグラフィ・ユニベルセル』は大体50年おきぐらいにでている。ブリューネの場合には直前の今世紀前半のヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュの『世界地誌』を強く意識しており，そこには共通点と相違点がある。フランスの場合，世界地誌にせよ国内地誌にせよ，商業出版社が何十年かおきに地誌シリーズを出すという伝統をもっている。いずれの場合も，1つの巻を1人で書くとは限らないが，少なくとも個々の国や地域は1人で書くという点では共通している。次に，ヴィダルの『世界地誌』をみると，ブランシャール（Blanchard, R.）のように1回も行ったことのないアジアの地誌を書いた人もいるが，どの巻をみても，たとえばアメリカを書く場合には，アメリカをいくつかの地域に分けてそれぞれの地域を書くというスタイル，すなわち地域的な記述スタイルが多い。おおむね地誌的シェーマ（länderkundliches Schema）に沿った記述方法だと思われる。それに対してブリューネの方はまだ5冊しか出ていないけれど。

米田　巖：すでに6冊でている。

手塚　章：第1巻目は総論なので各論は5冊だが，見るとわかるように国単位に構成されている。それも主要国中心だ。フランスという国は，中等教育段階で地理に割く時間が非常に多い国だが，ブリューネの世界地誌はこうした地理教育と連動していると思われる。中等教育の地理のカリキュラムでは主要国に重点が置かれている。その結果，たとえばラテンアメリカも国別に説明している。メキシコはどうとかブラジルはどうとか，主要国については非常に詳しく書かれている。その国について，その国内の空間構造を提示するというやり方だ。もっとも，一概にいえないのも事実だ。先ほどは話を単純にするために，コレーム地理学が原論で述べられておりそれに則って各論が書かれているといったが，実際には，たとえばフランスの巻をみると，コレーム流の図は1枚も載っていない。その点では筆者の個性が出ている。しかし全体としては，コレーム地理学流の発想に基づいて，きわめて社会科学的な枠組で書かれていることは確かだ。

米田　巖：最後の質問は熊谷氏に対するもので，「結局，これからの地誌学とイデオロギーはどのように関連していくべきなのか」という質問だ。

熊谷圭知：簡単な質問ほど答えるのが難しい。私は結論の一番最後のところを省略してしまっていたことにいま気がついた。一番最後の「新たな地域理解の方法論を目指して」というところで，結論として一言触れておきたいと思っていたことがある。それは「何のための地域の理解か」を考えてみたかった。私は地誌学という言葉を最初からあまり使っていないが，地誌にしても地域研究にしても，それは良くも悪くもある時代の要請のもとで形成されたという事実がある。もちろん，それに全面的に規定されているという乱暴な

議論をするつもりはないが。そうであるとすると，結局「何のための地域理解か」が問われるだろうと思う。その地域を知ることによって何をするのかが問題だ。ある留学生から，アジア経済研究所の図書館に行って，自分の国の資料が自国の図書館よりも多く集められているのをみて恐ろしくなったという話を聞いたことがある。その気持ちは非常によくわかる。つまり，そういう形で他国，とくに第三世界の情報を先進国の人間が集めるということは，集めること自体は中立的な行為であっても，それがどう利用されるかという問題に無関心に研究をするわけにはいかないだろうということを感ずる。したがって，そういったことを無視して事実だけを報告することに徹するのは，それも一つの立場ではあるが，それがどう利用されてもかまわないというのはやはり無責任ではないか。その場合に私が考えるのは，極端にいえば植民地支配のために地域研究をすること，たとえば中山氏がもう少し紹介されるかと思って期待していたが，かつてわが国の満鉄調査部などのデータは，おそらくそのような目的をもったデータであって，そこに住んでいる中国の人たちへの共感や中国文化に対する理解は多分そこには含まれておらず，いかに効率的に経営していくかという必要のために集められている。私がいうのはそのような問題であり，それとは異なった理解のあり方が求められるべきではないかということだ。もし生活者の共感を伴わない理解に徹するならば，それは支配の道具に利用されてしまう危険性を常に含んでいるということを自覚したうえで，それではどうすればよいかが問題になる。「地理学は戦争をするために役立つ」といったのはラコストだが，私は「戦争をしないために地理学がいかに役立つか」ということを考えていきたい。それがイデオロギーかどうかは別として，そういう形で地理学者が地域を語り研究していくことが必要ではないか。そのような形での地域理解には価値観も含まれるが，「透徹した」というところまで突きつめてその研究がどう役立つのかを自分なりに考えていかないといけないと考えている。

米田　巖：明快に答えていただいたように思う。残り時間が少なくなったが，17時過ぎくらいまでこのシンポジウムを続けることは可能と思う。与えられた課題は「地誌学とエリアスタディー現状と課題－」ということであり，いま一度再確認しておきたいが，あくまでもそれは導きの糸であり，これに事寄せてすべて縛ろうということでは決してないことを了解していただきたい。しかし一応はステッピング・ストーンとして確認しておく必要がある。第１点は，地誌学の社会的有用性，社会は地誌学に本当に何かを求めているのか，ということ。空想的な全体像であり不毛な話に過ぎないというような極端な評価もあろうかと思う。私どもからみれば身の毛もよだつような，そして存在根拠を否定されてしまうような低い評価も他方においてはあるようだ。しかしながら，これからの国際社会を生き抜いていくためには，何らかの形で地誌学的な素養・教養あるいはまた世界観といっ

たものが必要でないはずがないという気持ちは，共通して日頃感じていることではなかろうか。第2のポイントは，地誌学研究はこれまでいろいろな形でなされてきた。広く人口に膾炙しているとは思わないが，コログラフィー（chorography）といったりコロロジー（chorology）といったりしている。ドイツ・フランス・イギリスを中心として，とくにドイツあたりでは，伝統的なレンダークントリッヘス・シェーマ（länderskundliches Schema）やディナミシェ・レンダークンデ（dynamische Länderkunde）から問題をうまく解いていこうとするものや，中心的な課題を設定してそれを中心に関連した事項を扱うプロブレムオリエンティールテ・レンダークンデ（problemorientierte Länderkunde）のような考え方もある。あるいはまたロカリティ・スタディーズ（locality studies）もある。いろいろな様態があろうかと思うが，これを横並びで比較するよりも，これに付けて加えて私どもが地誌学においてさらに高い地平を望むとすれば，どのような接近方法がよりプロダクティブなものとして望まれるのかという問題である。ラントシャフト（Landschaft）といってみたり，私どもが学部・大学院時代を通じて教えられた最高概念であるアメリカ流のコンページ（compage）という概念などに，地域像が最終的には近づいていくと仮りに考えるならば，総合性ということは避けて通ることができないだろうと思う。最後はエリアスタディをはじめとする地誌学を中心とした隣接分野との協調・協力関係をどのようにうちたてるかという問題だ。この4つに事寄せて考えてみることができないだろうかという問題提起をもう一度再確認をさせていただきたいと思う。それと同時に，第一線の研究者が広島の地にわざわざ来られる機会はなかなかないと思う。学説史・研究史の整理，系譜の整理や理論的なフレームワークの再検討，フィールドからの知識の還元など，いろいろなところから地誌学の再生の可能性を検討することができるのではなかろうか。座長職権で勝手ではあるが，オーガナイザーの方からの主旨説明もあったので，このような方向に向けて残り時間を使いたいと思うので，その線に沿ってご発言いただきたい。そのための1つの糸口として，1つ2つ出してみたいと思う。どうも地誌学はおもしろくないという話をよく耳にする。読んでいる方もおもしろくないし，書いている方もおもしろくない。調査はもっとおもしろくないというような叱正をいただいている。こうしたことは私どもひとりびとりのジオグラファーも以前から考えていることだ。しかしながら翻って考えると，事実記載はおもしろくないからといって放棄してよいだろうか，不要なものだろうか。こうした根本的な問いも自分自身に対して問うてみる必要があるのではなかろうか。それから，どの報告者も話したことだが，地誌と地域研究はまったく別ものだろうか。地理と地誌との間はそんなに明快に区切って，明快な形で使い分けなければいけないだろうか。これはキー概念なので，おろそかにすることはできないと思う。こ

のあたりからひとつ発言していただければと思う。もう１つは多少具体的な話になろうかと思うが，報告者のコンテントについて，堀氏が触れたように思うが，土地の「地」を意味する「チ」の体系を認識の対象ないしは容器とみなして，血液の「血」の体系を認識の主体と仮定すると，これは難しいことが起きてくるかもしれないが，客観的に解釈ができるのではないか。それは難しいようではあるが，科学であるからには，漏れこぼれのないようにそのターゲットを対象化して，それを限定して明確に体系的に書いていくという地誌的な記載をきちんとすることも大事だろうと思う。いわば主体対客体という環境をどういうふうにとらまえたらよいかという問題だ。つまり，ぬめぬめとした非常にデナーミッシュ（dynamisch）な地域のシーンを切りとっていくやり方については技術的にも難しいだろうと思うが，とくに〈霊の体系〉ということになると，私どもの常識でいえば，場所の精神（ゲネウス・ロキ）というのもあるようだが，霊の体系まで射程距離に入れると，その方法論にはどういう方法があるのか，説明していただきたい。堀氏を指名して申しわけないが，多少長くなっても結構なので，プロダクティブな方向を示していただきたい。

堀　信行：地形を記載したり土壌を記載したり，水文環境などまったく自然地理に徹してものをみていくには，自然自体がもっている空間システム，たとえば流域とか斜面のユニットとかに当然目がいくし，そのことから成り立っている自然自体の相互関係をみる自分が確実にそこにあるわけだ。したがって，それを確実に記載したいという衝動にかられる。「地誌」という単語をやめてはどうかという発言に対しては，私はまだやめたくないとだけいっておきたい。ところで，自然を語るときにそれだけで地誌を語っているとは思っていない。それは，たとえば地形学であったり，何々水文学であったりとか，その部分に関わる自分を貫いているわけだ。これはこれで，場所のもっている特性がイメージされる。ここであまりアミニズム的発言をしてはいけないが，「石の気持とか，土の気持とかいう，石や土が辿ったであろう歴史，たとえば礁石灰岩中の造礁サンゴをみて，何万年前におまえは生きていたのだろうか」とかを考える。仮に私が造礁サンゴに聞いても，もちろん返事はないけれども，造礁サンゴに代わって，この点でサンゴの気持を一方的に語ることにおいて傲慢なことになるが，自分が答えてみる喜びを感じる。それには限りない喜びがある。しかし，そのことが地誌だとは思わない。ただ，そういう自分がまずあるだけだ。ところで，そこにある人が住んでいて，そしてある生活が成り立っているということに目を向けた瞬間から，私は，私と他者との間の問題に発展する。したがって，そこに地面があるのかだけの議論をしているときには，他者は私の中にはまだいない。ところが，そこに他者が存在すると考えた瞬間に，私とその間にものすごい種々の葛藤をも含めて，限りない問いが発生する。つまり，そのときに土地の人に映っている岩石や土壌は私がみた土壌

と違うだろうと，まず考えなくてはならない。同じであると思い込むこと自体とんでもないことだと思って，相手の眼でその人たちのいる場所をみたらどうみえてくるかを考える。そこには限りないプロセスがある。限りない営みを調査者として行うことになる。これは限りないそのプロセスの中に自分を置くと，絶対イコールにならないことはわかっている。そのときにすべきことは限りなく相手の言語生活の中に近づくか，あるいは思考生活の中に近づくことだ。そのことによって，相手がみているであろう視線の動きまで自分の中に入ってくる。たとえば私の経験でいうと，カラーチャート（color chart）をみせてこれは何かといったときに，私には色だけが眼に入っている。ところが相手の眼はちらついている。その瞬間に，この人は何をみているのかという興味がわいてくる。実は，色は，色だけではなく，他のものとの組み合わせによっていろいろ識別することがあるということを知ったとき，私の心に強い衝撃が走る。つまり，私たちは自分の思いこみで当然相手は知っているだろうとか，このように答えてくれるだろうとかを要求するのは私が勝手に用意したフレームワークであり，相手のフレームワークは違っているのだ。フィールドワークをすればするほど文化の深みが明らかになる。このように膨大な種類のフレームワークが存在するこの世界に自分がいる限り，研究は終わりのないプロセスであり，限られた人生の中でそれを限りなく続けるしかないという，ささやかなことしかいえない。要するに，他者の目を共有する努力が必要だ。これが調査の中で行われると思うし，それを確認する種々の質問，確認する行動をする必要があるし，フィールドでの自分の住み方自体他者との関係において自分，全自分がそこにいるわけだ。それを重ねていくうちに，他者の眼の一部は共有できるようになってくるので，そのとき自然についても，私にとっての自然ではなくて相手にとっての自然環境がみえてくる。あるいはみえているだろうと思うことができる。そのときに相手が何を考えているのだろうかという私の限りない問いが途絶えない限り，私は相手のコスモロジカルな世界を最終的には共有してみたいという衝動にかられる。これは抑えがたい衝動である。それを理解できるのは，先ほどどなたかが，地誌には名人芸的部分があるかもわからないとの発言があったが，私もそう思う。ただし，名人芸は科学ではないと考えている方は，若干控えめに発言しているこの感覚をわかってほしい。はっきりいえば，われわれはまだ開発していない科学があり，私はその部分も科学にしていきたいと考えていることを知ってほしい。われわれが今日もっている科学のイメージは，いささかギスギスした堅苦しい狭い領域に限定されているので，われわれは科学自体の認識を拡げていく努力が必要だと思う。つまり地誌は非常にチャレンジャブルな分野で，既存の科学に挑戦すべき要素をもっている。それを既存の科学に照らして，この点に矛盾があるからと引き下がるのは，自らのプロセスを遮断することになる。今の私の心境

では既存の科学の定義だけでは満足できない。

米田　巖：ご指摘の点はそれ自体自己完結的であり，ごもっともとしか申し上げられない。これに対して，フロアの方にもぜひご発言いただきたいと思う。個人の頭の中のレベルでのエソテリック（esoteric）な奥義みたいになってしまい，その手続きが検証されない，つまり追検されるような状態，テスタブルな状態に公開されてないというところがある。仮に今のように説明されてもそれはやはり堀氏流であり，堀氏にしかできないことであり，われわれはそれをただそうかといって聞く以外にない。あるいはその結果を聞いてなるほどすばらしいと思っていても，同じような形で手続きが公開され共有され，同じトゥールとして同じ形で共有すべきところにもっていく，つまり，〈世界〉解釈の共通基盤／照準枠組に立脚することが，これからの地誌学研究にとっては非常に大事なことと思う。その意味において自然地理の研究者が「自然地誌」を研究する場合，たとえば私が存じ上げている岩田修二氏から氷河地形調査の個票をみせてもらったことがあるが，非常に微細に調査項目をきちんと書いている。誰がやってもすべて追検できるような形になっている。データコレクションでは標本地点の設定がすべてスタンダーダイズされている。だから，ある意味ではテクニックさえ身に着ければ，プロセスさえ十分に理解できれば，最終的にその結果が正しいか正しくないか，どれだけ正しいかは追検できることになる。地誌学的な次元で多少それに近いような形で，疑似科学ではなく，それを共有できるような形で翻訳できないものだろうか。パラフレーズできないものだろうか，分節化できないものだろうか，という思いが多分にある。そういう意味でフロアの方からぜひお尋ねしてみたいと思う。福岡氏は気候誌，気候学に対して気候誌という考え方があるだろうと思うが，気候誌と地誌との違いよりも今のような考え方に立って地誌をどのように考えて研究したらよいと思うか。

福岡義隆（広島大学総合科学部）：私自身は広島大学ではあまり経験がないが，他の大学で地誌の講義を頼まれたことがある。先ほど高橋氏からも質問があったし，発言しようと思ったことがある。やはり，自然地理学者としての役割はあると思う。しかし，堀氏がいったように，あまり意識しなくてもよいのではないかと次第に思うようになってきた。それはあの和辻哲郎氏の『風土』にもあるように，私たちはとかく夏というと，熱帯夜とか夏日とかいう温度に換算して考えるけれども，夏とは人間の存在のあり方であり，生活の仕方であると思う。和辻哲郎氏の名文句からもわかるように，人間の生きざまだと思う。私も次第にそのように考えてきており，自然地理学は気象学ではないし，気候学は気象学ではない。より人間科学に近いものであると私も次第に思うようになっている。ただし，たまたま私が地誌とか地誌的な調査をしたり講義をするときには，やはり網羅的にやるの

では自分もおもしろくないから学生もおもしろくないと思う。だから話題を自分の得意なもの，題材やエピソードは自然地理学的な事象でもって地誌の一端をやっていくという姿勢で私は研究してきている。たとえば環境問題あるいは気象災害，都市気候など，どの事象を取り上げても地理学と非常に密接な関係があるし，自分が取り組んできた生きた授業は学生にも比較的興味深く，わりとおもしろく聞いてもらえるのではないかと思って他の大学で講義し，ある程度評価されている。それに関連して，人間社会との密接な関係のうえで気候という自然地理事象を扱ってきているが，最近農業気象学会でため池のシンポジウムを私が主催した。そのなかで，４人の話題提供者のなかに私ともうひとりの人文地理の研究者がいた。最終的にいろいろな提言ができたのは私も含めた地理学者だけだったような気がする。そういう意味では，私は地域から説明するのは不得意なので，何々地域ではなくてテーマから入るのも１つの地誌ではないかと思う。たとえば「ため池の地誌」とか，「大気汚染の地誌」とかいうようなやり方で授業をしたらやれるような気がするし，生きた授業，生きた学問ができるのではないかと思う。しかし根幹にある研究手法とか解釈の方法は，やはり結果的には地理学的であったというのが感想だ。そのような意味で中山氏の先ほどの発言で若干気になったのは，もっともなことではあるが，書いてみたい欲望というか，社会的な変動のときに書くのは本当に生きたものとなり，書きたいと思って書いたものは読んでいる方でも楽しいと思う。すばらしいものだと思う。しかし私は，それを自律的な動機とすれば，もう一つ他律的な動機もあるように思う。他律的な動機からも書いてみたい欲望も出てくるという私の経験をお話したい。私は県史とか町史というのはあまり好きではなかったが，石田　寛氏に岡山県史を頼まれたときに，すばらしい地誌の取り組みでいまだに勉強になったという思い出がある。調査してきたことをみんなでセミナーや発表会をやって，自分では気がつかなかったことをいろいろと教えていただいた。そのようなやり方から次第に地誌のおもしろさを感じてきた。したがって，他律的なものはやはりあってよいのではないか，あり得ると思う。それと同じことが先ほど座長がまとめたなかに，社会的要請，社会への貢献というか，それとの接点では私は環境アセスメントの種々の調査に参加している。環境アセスメントはご存じのように，事前評価，自然環境，社会環境，文化環境，最近は景観環境などというものがあり，どれ１つ取りあげても地理的事象だ。地理学者はいろいろ提案できるものを広く浅くもちあわせていて，結果的には何か地誌的なことを私は提言してきており，環境アセスメントをまとめるなかにも地誌的な取り組みが生かされていると思ったりして自己満足に陥ることがある。だから環境アセスメントだけでも１つのテーマであり，そこから地誌的なもの，地誌的なやり方，見方が取り入れられるのではないかと感じている。

米田　巖：長年のご経験からのご発言で私どもに大変重い意味のあることだと思う。必ずしも地誌研究に限定しているわけではないでしょうが，同じような形で自然地理学を研究している中田氏に一言ご発言いただきたい。

中田　高（広島大学文学部）：私は今日の話を聞いていて感じたことは，地誌学とエリアスタディについては，地域研究をしている者も地理を研究している者も扱っている対象は同じであって，そこで地域性を明らかにしようとするか，その現象自体を体系化したりモデル化しようとするかという点での差異があるだけではないかと思う。結局何が重要かというと，基本的には質の高い研究成果－科学的である方がよいが－を出すことが重要で，それを積み重ねていけば，データそのものの質が高ければどんなものでも利用できると私は考える。その点では熊谷氏と非常によく似ており，私のスタンスは地理学者の立場でエリアスタディをするというよりは，エリアを意識せずヒマラヤ山麓を調査している。その結果がどのように使われていくかという問題では無責任ではあるが問題にせず，質の高い自分の研究結果を出していくことがつとめであると考えている。それからもう１つは総合化の問題だが，これは無理な話だと思う。眼の見えない人が象にさわった時にいろいろなことをいうのと同じようなことが今の地誌学にはあるように思える。写真を撮ったら本質がみえるかというと，そうでもないだろう。現状と課題という点では今回のシンポジウムでは抜けていたが，エリアスタディであれ地理学であれ地誌であれ，いま一番重要なことは若い人に外国に行って仕事をするおもしろさを先にみせることのように思う。あまりにも本質からはずれた議論かもしれないが，私はそのような印象をもった。

米田　巖：もうすでにお答えいただいているのかもしれないが，地形学ないしは自然地理学者として地誌学をどのように構築すべきかについての見解はないか。それはできないということか。

中田　高：地域の特性，すなわち地域性を明らかにするために，すべてを説明する必要はなく，１つの特性でもある自然現象と人文現象が組み合わさって説明できれば，それはそれでみんなが興味をもつことであり，知的好奇心を満足させることもできると思う。したがって，すべてを扱うというのが難しい話ではないかと思うだけだ。たとえば，気候の逆転という１つの事象だけで人間がなぜ山の高いところに住んで低いところに住まないのか，そこでどのような生活を営んでいるかもわかってくる場合が多分あるだろうと思う。ひとつひとつの事実を立派に分析することが大切だ。もう少し人文地理の研究者に自然のおもしろさに興味を示していただきたいと思う。それさえあればおもしろい地誌はたくさん書けるのではないか。

米田　巖：耳の痛い話だ。自然地理学ができる先生方は人文地理に入ってこられると非

常にうまいことをいわれる。残念ながら，その反対がなかなかできない。それはよい意味でも悪い意味でも自認せざるを得ない。人文地理の研究者には自然地理の先生方を驚かせるぐらいすばらしい質の高いものを書けるかというと，果たしていかがなものだろうかと感じざるを得ない。中田氏は無理な総合化はしなくてもよい，若い人間たちに地域研究のおもしろさを現場で教えることの方が大切だと，よい意味での自己限定と私は承った。しかしその一方において，同じフィールドに臨んで，ここから人文，その先は自然と直截的に区分できないし，すべきでもない。微細地誌を描くため，ミクロスケールで調査を実施するときなどは特にこのことを痛感する。その意味で総合化もまた，地誌研究には大いに必要とされるスタンスではなかろうかと思う。この点について村上・北川両氏はどのように考えるか。

村上　誠（広島大学大学院国際協力研究科）：20年来エアリアスタディのコースに属してきた私は，いま学部の授業で外国地誌を１つ受けもっている。今日地誌についての話を聞いて驚いたが，地誌はいらないということはおそらく地理自体も終わりだという意味だろうと私は感じる。地誌をやめた地理学者，地理学というのはあり得ないと私はかねて思っていた。確かにいろいろな項目を網羅する伝統的な地誌もあるが，今日のシステマティックな地誌ないしは最近のダイナミック地誌というか，それぞれの場所を特徴づける項目を重点的に取り上げる地誌の手法がある。これが１つの方向だろうと思う。次にどうして，こういう地誌は「致死傷」の「地誌」になるかという問題について，最近の地理学を研究する方は，中田氏がいわれたように外国へ行かない。フィールド調査を知らない。そのためトータルとしての場のイメージがわかないのではないかと，私自身も込めて反省すべきだと思っている。次に，地域研究と地誌については，地理学に携わる者は，地域研究はわれわれの手の内だという発想は早くなくさなくてはならない。そのなかで地理学ができるのは何かをきちんと位置づけなければならない。これはその場の性格や研究の構成員によって自ずと変わってくるかもしれない。

米田　巖：北川氏にも発言を願いたい。

北川建次（広島大学学校教育学部）：私も学部が教員養成系に属しているので，地誌について多くの講義をしている。日本地誌や外国地誌の講義を行い，県史や市史を書いてきていろいろ感ずることがある。１つは先ほど中山氏もいわれたように，地誌の見方にしても時代の流行があり，キー概念が違ってきている。私らの若い頃には，地域構造のような非常に理論的なものを強く求めていた。明治・大正の頃の地誌論文を読むと，それぞれの地域のところでどういう川があり，山があるなど山川草木を取りあげており，理論的な地域構造に触れたものがないのは時代遅れの古い地誌だと思っていた。最近私はある一定の

地域の中で，その地域の人々がいつもみている山は非常に大事であるし，草木も植生も非常に大事なものではないかという精神性が少し出てきた。地理学者が地誌を書くのであれば，自然地理の方がいったように，自然と人間との関連が非常に大事ではないかと思っている。いま村上氏がいったように，私も西条盆地の調査をしているが，西条盆地をみたときに，盆地であって赤瓦の屋根の景観が非常に多いのは気候景観として気候に結びついてくるし，福岡氏がいったように，盆地でため池が多いのは非常に大事なことだと思う。このようにキーワードではないが，地域の中で何を１つの代表として取り上げていくかは地誌研究において非常に大事なことである。いま私は中国地誌やインド地誌を講義しているが，そのなかで一体何をキーワードというか，地域のなかの重要なものとして取りあげていくかに非常に悩んでいる。恩師米倉先生がいわれたことがあるが，次第に経験を積んできて，優れた地理学者が優れた地誌を書いている。地理学者は何らかの形で地誌を書かなければいけない。そこにその人の多年の成果が出てくるのではないか。地誌を書くところにその地理学者の本質が出てくるように思う。

米田　巖：最後の発言大変耳の痛い話であり，虎は死んで何かを残すように，私どもも何かを残すことに対して答えていただいたものかと思う。しかし力も限られ，時間も限られているのでむづかしいことだ。それにもかかわらず立派な地誌学を書いて，私は地理学者だったというふうに，後生名を残すというのも１つの生き方かもしれない。大変難しい課題を与えられているように思う。依然として前途遼遠であるが，今日私自身大変うれしく思うのは，隣接科学の方から日頃のご研鑽の一端を親しくうけたまわることができることだ。今日は異集団の中に入って肩身の狭い思いをしておられるかもしれないが，同じ場を佐竹氏は歴史学者としてアプローチし私どもは地理屋としてアプローチしてるわけで，場は共有しているように思う。そのことについて一言いっていただくと大変うれしく思う。これからの地誌研究を歴史家としてどうしてやるのかという意味ではなく，佐竹氏自身がこれから地域とどのように関わっていくのか，それが私どもにどのように裨益するのかを教えていただきたい。

佐竹　昭（広島大学総合科学部）：いろいろお話を聞いて，理屈もこねなくてはいけないのだなという印象が一番強い。私の感覚的なことを申し上げると，自分はできないけれども，堀氏のお話などが比較的よく理解できる。最後にいわれたチャレンジャブルな分野だという点だ。それは結局は地域にしか何もないわけで，そこで地域に出向いて，さまざまな自然と人間生活のあり方，さらに積み重ねられてきた過去を読み取ろうとする。ところが研究というのは無限の可能性のなかから勝手に一部を切り取って消費してしまうわけで，できあがったものを読んでもおもしろくなく，書いた人はもう二度と自分の論文はみ

たくないということにもなる。地域のなかへ入ってごそごそと調べているときがおもしろい。その点でいえば，いろいろ理屈をいうけれども結局はまた地域へ戻って行くしかない。その繰り返しという気がする。地域研究と歴史学という話がその次にあると思うが，同じような問題が歴史の方にもあると思う。つまり体系的な歴史の筋道を通そうというような研究をする立場もあれば，むしろ一定の地域の特質をしつこいほどいろいろな角度からほじくり回して何かを書こうという立場もある。資料の八艘飛びのような形で歴史の理論的な筋道を作っていくのもよいが，それを踏まえながらある１つの地域に沈潜していくやり方を私はとりたい。たとえばここに『国郡志指出帳』があるが，これには１つの集落の中に鳥とか植物とかが全部書かれている。たとえば木の名前などが書いてあり，そこの村の中には多くの木が生えている。地域の人と古文書勉強会を開いていると，堀氏がいわれたとおりで，これは天秤棒に使える木だというような反応がある。私はただ博物学的に，名前をただ分類学的に載せているのかと思ったらまったく違う。故事来歴のあるものばかりが掲載されている。そのような世界像を何とか復元したい気持ちが強い。ただ，それをおもしろいぞと叫んでも，学生はあまり反応してくれない。むしろこういう視点は東京あたりで評価されることかもしれないが，田舎で目の前でみていると，実はまったくみてないのにもかかわらずみているような気になって，自分のものになっていかない。かえって地方にいたほうが地方がみえないようなーつまり社会自体がみえないようなー印象を受けている。要するに地域に沈潜するといっても見る方の力量不足が問題だ。もう１つは，歴史の方でも今はとくに日本史などは行き詰まり状態だと思う。ひと昔前には環境なんとかがずいぶんはやった。歴史の方でもたとえば時代区分のような問題を考えても，「封建制だ」「資本主義だ」というよりも花粉分析をしてみると，赤松の花粉が50％を越えると越えないとの時代区分のようななかで人間の歴史を考えていく枠組みを，実は歴史学は早急にやらないと全然だめだというような状況にあると思う。そのような意味では，別々に議論している場合ではないというのが私の感想だ。つまり，ますます総合的，地誌的把握が必要だと思う。しかしそれはやればやるほど，学者が地域に入り込んで地元の人に代わって地誌を書けば書くほど，だんだん悪い方向に行く面もある。先に事例を紹介したが，日本では地誌は結局よいことは何もなかった。それは民衆そのものがそういうものを生み出していっているわけだが。だからこれからもよくない可能性はあるが，それでもやるしかないというのがいまの私の心境だ。そのような気持ちでいる。

米田　巖：時間のゆとりもなくなって，大変申しわけないが，一応終幕を告げなければいけない時刻になってきた。私どもの二人の力でどこまで目的を達し得たかはなはだ自信がない。米倉先生に一言いっていただき，最後にセンター長の方からご挨拶をいただきたい。

米倉二郎（広島大学名誉教授）：本日は早朝より講師の諸先生の熱心なご発表をいただいてありがとうございました。簡単な感想を申し述べたいと思う。堀氏は地誌的思考の特性として4つの体系をあげた。高谷氏は，地域の世界単位を認識する方法として，直観によるという。堀さんの「チ」や霊魂の体系と一脈通ずるものがあるように拝察した。熊谷氏の第三世界の地域研究では，広島大学のインド調査をご批判いただきありがとうございました。まったくいわれるとおり方法論などにおいて寄与するところが少なく，他の学会などとの交流が少ないことを反省させられた。1935年から40年生まれの海外研究者は層が薄いというご指摘だが，広島ではいくらかそのへんの層を養成できたかと思っている。これから芽が出るのではないかと期待している。私は中国の地誌を書いたときに，シオン（Sion, J. 1928）の『アジィ・デ・モンスーン（Asie des Mousson)』を利用させていただき，大変感銘を受けた。手塚氏からフランスの新しい地理学をご紹介いただき，その新訳本などを拝読したいと思っている。最後に中山氏には，日本の地域研究，地誌学研究を総括していただき，これからの向こうべき方向をお示していただいたように思った。以上は私の理解したことだ。

森川　洋（広島大学総合地誌研究資料センター）：以上をもって今回のシンポジウムを終了したいと思う。早朝から長時間にわたって非常に質の高い話を東広島の地でご論議いただき，大変ありがとうございました。地誌研究については参加者のすべての方々が大変興味をもっておられることを感じた。今日は時間が不足したように思う。でき得ればまた，何年か後にこうしたシンポジウムを催したいものだと思う。今日議論したことは『研究紀要5号』に報告し，広島の地から発表したいと思う。どうも本当に長時間にわたりありがとうございました。

（広島大学総合地誌研究資料センター　森川　洋・磯田則彦　記）